

## 国際化について思うこと

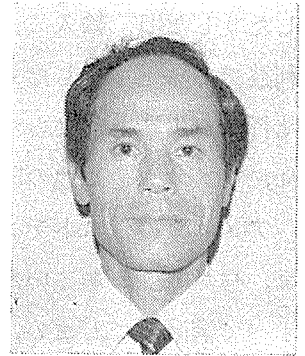
田 中 義 人

日本が経済的に強くなるに従って、日本の国と日本人の「国際化」が外国から求められている。日本の政府を初め政治家も学者も企業人もそれぞれの立場で国際化を目指して努力しているわけであるが、一概に国際化といっても、それぞれの立場や経験でいろいろなことが言えるであろう。

今や日本人はビジネス、レジャーを問わず毎年何百万人という人たちが海外に旅行をしており、世界の隅々まで出かけて十分に海外の事物を見聞している。しかし、日本人は外貨を落とす旅行者としては歓迎されるが、時として旅行者の振舞いが非難されることがある。日本の中では常識的な行動として通用しても相手国では非常識なことと受けとられることもあろう。日本人のビジネス行動においても同じである。習慣の違いと言えはそれまでであるが、少なくとも相手に不快な感じを与えないようなマナーや常識を身につける努力も国際化のために必要であろう。

最近では日本語を学ぶ外国人が増えているようであるが、日本人誰しも日本語が国際語になり得ると思っていないし、そういう努力もしていない。むしろ明治の昔から外国語の習得が奨励され、中学、高校、大学で英語を中心とした外国語を10年近くも必修科目として教えられている。現在、巷には英会話学校が多数あり、本屋には英会話のテキストや会話テープが氾濫し、ラジオやテレビでは外国語レッスンの番組がある。最近では、衛星放送を通じて外国の生のニュースや映画が原語で流されており、その気になればいつでも外国語を身につける環境が整っている。筆者は昨年秋にアメリカのある学会の国際諮問委員会に出席した。この学会には日本からも毎年多くの立派な論文が発表されている。この委員会の論議の中で、日本人は自分の論文を読む練習はしているようだが、質問されたらまともに答えられない人が多いので、来年から通訳をつけたらどうか、これが外国（日本）会員へのサービスではないかとの意見が出て筆者は日本人として口惜しい思いをした。日本の恵まれた外国語修得環境にもかかわらず、国際的な場で自分の発表論文に対する質問にまともに答え、討論できる日本人が少ないのは残念である。学校における誤った語学教育の結果として、言葉の修得を「語学」と受け止め、むずかしいものと毛嫌いされているのではなからうか。学術や技術の国際交流のためにも生きた言葉の修得はぜひ必要である。

さて、前記の学会は、もともとアメリカ国内に作られ、会員4000人を擁する学会であるが、外国人会員が全会員の20%を占めている。そのため、ヨーロッパの会員の中から、外国人会員のために会費の20%を使い、理事会に外国人会員代表を入れ、外国でも各種委員会やセミナーを開催するなど外国人会員のためにもっと便宜をはかるべきであるとの主張が出されている。すなわち、国際化をせよということである。我がPC技術協会にはまだ外国人会員の数は少ないが、もし将来、外国人会員が増えて



\* プレストレストコンクリート技術協会理事，神鋼鋼線工業（株）開発部長

同じような要求が出されたら、われわれはどんな反応を示すであろうか？ 国を挙げて国際化を標榜している日本人であるが、柔軟な対応ができるかどうかやや不安になる。

さて、日米構造協議において日本の建設業界の閉鎖性や談合体質がやり玉に上げられた。自由経済を信奉する両国にとって、お互いに市場の解放は当然の要求と思われる。アメリカは日本にとって重要なマーケットであり、日本はアメリカにとって魅力あるマーケットであることには違いない。かつて日本から鋼材その他建設資材を大量に輸出したり、日本の建設業者がアメリカの公共事業に直接間接に参加したりした頃、輸入によって公共事業の建設費が安くなることは、納税者であるアメリカ市民にとって利益であると主張したものである。一方、アメリカの同業者あるいはそれに働く人々は、日本のそうした行為を失業をもたらすものとして苦々しく見ていたことは事実である。日本は今や逆の立場に立たされ、アメリカその他の国から貿易の自由化や公共事業への参入を要求されている。

アメリカのポストテンション業界は、かつては、われわれが参考としたストレススチール、インライコ、ウエスタンあるいはプレスコンと言った立派な業績を残した企業があったが、ポステン屋としてはすべて消滅してしまい、今日では紆余曲折を経ながら外国系の2つのポステン屋が席卷し、弱小の業者が林立している。これも国際化、自由化の波であろうか。アメリカのポステン屋の衰退は技術的な競争よりも、過度の価額競争に引き込まれて自滅していったと思う。

日本のPC業界は、今や仕事の量と質において世界のトップクラスにきていることは間違いなく、21世紀に向かって世界をリードしていく立場に立たされていると思う。幸いにして、日本のPC業界は先人の努力によって、当初から外国との交流が行われ、国際化の中で育ってきた。プレストレストコンクリート(PC)そのものが外国で生まれ、その技術が日本に導入されたものであり、今日日本で使われているPC工法の大半は外国で開発されたものであるが、何の違和感もなく使われている。日本ではPC技術の開発や改良も盛んであり、4年に一度のFIPコンGRESには日本から多数出席しており、論文も多数発表されている。また、当協会の会員の中からFIPの各種コミッションにも委員として参画しておられることは大変喜ばしいことである。1993年に日本で開催が予定されているFIPシンポジウムにはぜひ多くの外国人に来てもらい、日本人も多数参加し、成功させたいものである。こうしてわれわれも日本の国際化の一翼を担い、国際社会の一員として世界に貢献できる場面が与えられていると思う。